

モダンクラフトクロニクル  
—京都国立近代美術館コレクションより—

会期 2021年7月9日～8月22日  
※会期中に一部展示替えがあります  
(前期8月1日まで、後期8月3日から)  
会場 京都国立近代美術館  
主催 京都国立近代美術館、京都新聞



音声ガイドのご案内  
音声ガイドアプリ「カタログポケット」をインストールいただくと、本展の出品作品のうち39点の解説と会場のコーナー解説全7点を音声・テキストでお楽しみいただけます。館外でもご利用いただけます。



モダンクラフトクロニクル展  
鑑賞のおとも  
執筆・編集 大長智広、松山沙樹(京都国立近代美術館)  
デザイン 坂本佳子(大向デザイン事務所)  
印刷 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社  
発行 京都国立近代美術館  
https://www.momak.go.jp/  
©2021 京都国立近代美術館



コレクターが  
作家に内緒で  
国際展に  
出しちゃった！

河井寛次郎  
(かわい・かんじろう 1890-1966)  
《白地草花絵扁壺》  
昭和14(1939)年  
33.0×30.0×22.0cm  
陶器

ひし形の胴体にひし形の口をした壺。そこに草花が踊るように描かれています。この作品は河井の支援者でありコレクターだった川勝堅一さんが収集し、その後京都国立近代美術館にまとめて寄贈された「川勝コレクション」を象徴するもの。1957年のミラノ・トリエンナーレ国際陶芸展に川勝さんが河井に無断で自身のコレクションの中から出品し、見事グランプリを受賞しました。河井と川勝の友情の証ともいえる1点です。

3階

## 豪華絢爛

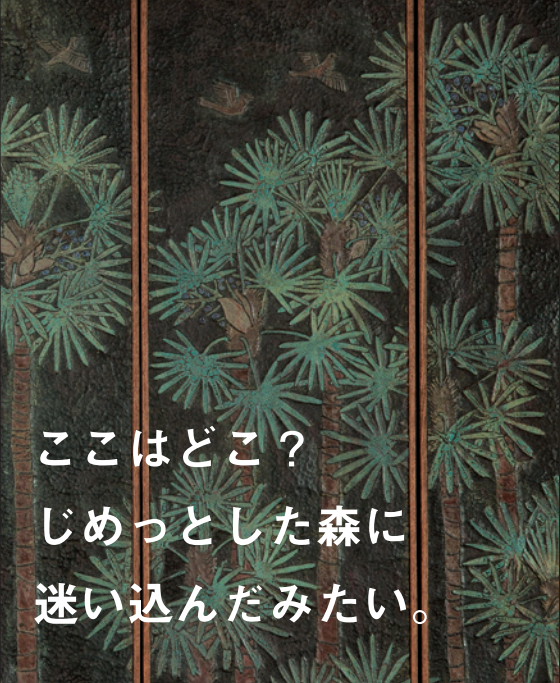
な着物。  
どんな時に着てみたい？



三代田畑喜八  
(さんだい たばた・きはち 1877-1956)  
《一越縮緬地鳳凰桐文振袖》  
昭和29(1954)年  
177.0×132.0cm  
絹、友禅

江戸時代から続く、京都の手書き友禅の名家の三代目として生まれた喜八。手描き友禅とは、隣り合う色同士がにじまないようにのり防染をした後に、一筆ずつ丁寧に色を挿していく伝統的な染色技法。三代喜八は、対象の真に迫る写生を行い、それらをぎゅっと組み合わせた密度のある構図を持った図案を作ったことで高い評価を受けました。この作品では鳳凰と桐が黒地に大胆にあらわされ、ひときわ目を引きまします。

4階



ここはどこ？  
じめっとした森に  
迷い込んだみたい。



藤井達吉  
(ふじい・たつきち 1881-1964)  
《棕櫚図屏風》  
大正5(1916)年頃  
121.5×216.0cm  
七宝、銅、打出

藤井達吉は、素材や様式、技巧にとらわれず、自分の感性を直接あらわす方法を追求し、木工、漆工、七宝、染織、和紙、陶器、絵画など様々な表現に取り組みました。この作品のモチーフは、ヤシ科の植物である棕櫚の森。銅板で模様を打出した後に七宝で彩色し、屏風に仕立てています。横方向に広がっていく棕櫚の森は、まるで次々に打ちあがって大輪の花を咲かせた花火のようにも見えます。



ユーモアたっぷりな人物や鬼たちにも、ほっこり。

杉林古香 図案: 浅井忠  
(すぎばやし・こう 1881-1913、あさい・ちゅう 1856-1907)  
《大津絵銘々皿》  
明治後期  
(各)2.4×15.0×15.0cm  
漆、蒔絵

1900年のパリ万博でみた「アール・ヌーヴォー様式」に圧倒されて工芸に興味を持った、日本を代表する洋画家の浅井忠。帰国後、琳派や大津絵などを応用して新しい「図案」を生み出し工芸家に提供することで、近代京都の工芸界に大きく貢献しました。浅井によるこのお皿の図案は、大津で江戸時代からお土産として描かれてきた民俗絵画「大津絵」をもとにしたもの。交流のあった漆芸家の杉林古香が制作を担当しました。



この模様、どうやって  
あらわされて  
いるのでしょうか？

並河靖之  
(なみかわ・やすゆき 1845-1927)  
《桜蝶図平皿》  
明治時代  
2.5×24.6×24.6cm  
有線七宝

桜の花のあいだを色とりどりの蝶が飛びまわる、なんとも華やかなお皿。繊細にあらわされたモチーフは、金や銀の線で輪郭を作り、区切られた中にガラス製の釉薬を流し込んで焼き上げる「有線七宝」という技法で制作されています。並河靖之は京都国立近代美術館のほど近くに自宅兼工房を構えました。そして、国内外の数々の博覧会で受賞を重ね、非常に優れた工芸家として帝室技芸員に任命されました。



動物や  
虫や  
植物が、  
あっちにも、こっちにも！



旭 玉山(あさひ・ぎょくざん 1843-1923)  
石川光明(いしかわ・こうめい 1852-1913)  
大谷光利(おおたに・みつとし 生没年不詳)  
香川勝廣(かがわ・かつひろ 1853-1917)  
加納鐵哉(かのう・てつさい 1845-1925)  
加納夏雄(かのう・なつお 1828-1898)  
柴田是真(しばた・ぜしん 1807-1891)  
高村光雲(たかむら・こううん 1852-1934)  
《福祿封侯図飾棚》  
明治16(1883)年  
82.3×59.0×29.0cm  
紫檀、竹、象牙、銀、四分一、金、漆

明治期を中心に活躍した工芸家・彫刻家8名による合作。牙彫(象牙を用いた彫刻)、木彫、金工、漆芸、竹工など各自が得意とする技術で、さまざまなモチーフがあらわされています。たとえば天板にはいろいろなポーズをした猿たち。その下には、茄子や蜂の巣、コウモリも隠れていますよ。両扉の表には鹿や古代の瓦、そして開いた内側には犬、さらに内扉には風神雷神も。ぜひ、いろいろな角度からご堪能ください。

4階





オバケ？巨人の服？  
これ、なんと  
手織りでできています。



マグダレーナ・アバカノヴィッチ  
(1930-2017)  
《黒い上衣 V》  
昭和49(1974)年  
300.0×170.0×60.0cm  
サイザル麻、手織

ポーランド出身の女性作家アバカノヴィッチは、繊維を用いた巨大な作品を発表したファイバー・ワークの先駆者のひとり。あらゆる物事が時間の経過とともに変化し、異なる現象としてあらわれるという考えのもと、作品を次々に発表してきました。この作品は、サイザル麻を手織りして天井から吊るしたもの。「上衣」というタイトルから、そこには存在しないだれかの「身体」を意識させられます。



ぎゅ——っ。  
土を引きちぎる  
勇気と大胆さに  
脱帽！

ピーター・H・ヴォーコス  
(1924-2002)  
《陶彫》  
昭和38(1963)年  
20.0×32.0×18.0cm  
陶器

ヴォーコスは、アメリカ出身の陶芸家。巨大な作品や大胆な表現で世界中に影響を与えました。これは、土を引きちぎった跡をそのまま残し、中央に大胆に釉薬をかけた作品。1964年に京都国立近代美術館でも開かれた、日本初の国際的な陶芸展で展示されました。技術の高さや見た目の美しさを重視していた日本の作家たちは、ヴォーコスの表現に大きな衝撃を受けました。

アンティークのかばん  
かと思ったら…

？



マリリン・レヴィン  
(1935-2005)  
《バッグ》  
昭和45(1970)年頃  
28.0×48.0×29.0cm  
陶器

まるで本物のバッグのような「陶器」。水分を含んだ土を使い、土の状態を見極めながら革のような柔らかさを残した形を作り、そのまま高温で焼き上げることで「本物っぽさ」を追求しています。1960年代後半から70年代に流行した、対象をそっくりそのままあらす「スーパーリアリズム」という作風の影響を受けた作品。顔を近づけたら革の匂いがするんじゃないか……と思うほどリアルですね！



「ソーシャル・ディスタンス」  
って、このくらい……？

八木一夫  
(やぎ・かずお 1918-1979)  
《距離》  
昭和49(1974)年  
27.5×60.0×16.0cm  
黒陶

京都の陶芸家の家に生まれた八木一夫は、前衛陶芸家集団「走泥社」を代表する作家。器としての実用性をもたない「オブジェ」を発表した最初の世代の一人で、やきものの新たな表現の可能性を切り開きました。この作品は自分の手をかたどりにして作ったものですが、両手があらず距離が一体何であるか、本人は明確には語っていません。さて、みなさんは何の距離だと思いますか？

ドクン、  
ドクン。



小名木陽一  
(おなぎ・よういち 1931-)  
《人工心臓》  
昭和50(1975)年  
60.0×50.0×50.0cm  
木綿、立体織

常に日本のファイバー・ワークの第一線で活躍してきた小名木陽一。この作品のほかにも、手や胃袋、腸など、人体をモチーフとした作品を発表しています。たとえば国立工芸館(石川県金沢市)には、《赤い手ぶくろ》という高さ2.6mにもなる作品があります。小名木は、「立体織」という方法を独自に考案し、支えとなる構造材を中に入れることなく繊維のかたちを自立させることに挑戦しました。

重なり合う  
鳥居と松が、  
今にも  
動き出しそう！



二十代堆朱楊成  
(にしゅうだい ついしゅう・ようせい 1880-1952)  
《稻荷山硯箱》  
大正10(1921)年  
6.0×23.6×25.4cm  
漆、彫漆

「堆朱彫」という、漆を何層も塗り重ねてから模様を彫る技法で制作されています。中国から日本に伝わった技法で、堆朱楊成家は南北朝時代(14世紀半ば)から続く堆朱彫の名家です。この作品の題材は京都の伏見稲荷大社。ふたには密集する鳥居が朱漆と黒漆で逆「く」の字型にあらわされています。その様子はまるでうごめく生命体のよう。稲荷山の神々しさが際立っています。



ビューン！  
かけぬける鹿に  
魚も鳥も  
びっくり仰天。

番浦省吾  
(ばんうら・しょうご 1901-1982)  
《海と山と空時絵衝立》  
昭和6(1931)年  
159.3×182.0×47.0cm  
漆、蒔絵

躍動する鹿が、海、山、空の境界を切り裂きながら疾走していきます。その裏側には、暗緑色の背景にブドウやトウモロコシがいきいきと表現されています。作者の番浦は、単純な形で画面を構成する「アール・デコ様式」の影響を受けながら、そこに動きのある表現を加えました。単なる模様としての美しさを超えて、それ自体が見るものの心を動かすような力強い作品に仕上がっています。



家に飾るとしたら、  
どこに  
置いてみたい？



富本憲吉  
(とみもと・けんきち 1886-1963)  
《色絵金彩羊歯模様大飾壺》  
昭和35(1960)年  
23.0×27.0×27.0cm  
磁器

富本憲吉は「色絵磁器」の技法で人間国宝に認定された、日本の近現代陶芸を代表する作家。「模様から模様を造らず」という精神で、身近な植物のスケッチなどをもとにしながら独自の模様を生み出しました。赤色と金色でシダ模様を市松状に描いたこの作品。よく見ると、金の部分は赤の上からなぞっています。下地の赤が影響して金の発色を深くするために、こうした手法を用いています。